

高校教師の

俺が生徒に  
(男子)

欲  
嗚

するなんて  
ありえない!

作者

ぱちゅ子

朝目が覚めた時ってのは、その日見た夢だとか、大体昨日の出来事だとか、今日の予定だとか、思い出したいくない事だとか、何かしら頭の中にそれがあって、自然と消えたと思えばすでに身支度を始めているものだ。しかし今日という日はどうだろう？頭の中がまっさらだ、しいて言えば二日酔いで頭が痛いし、定期的に吐き気もやってくる。そして、そのすべてを打ち消すかのように刺激を与える体中を包むぬくもり。

「なんで俺男子生徒と朝チュンしてんだ？」

よくあるよな？目が覚めたら知らなない天井だったとか、見知らぬ部屋にとか。でもここは自宅の天井だし、確かに俺の寝室だ。なのにどうしてだろうか、俺のベットの横には全裸のイケメン男子高校生が静かに寝息を立てているではないか。

「なにこれ、どういう状況？ドッキリとか？なに？え？人間ってパニックになるとこんななるの？」

「あれ、もう朝？へへっ、おはよ、せんせっ！」

イケメン男子高校生は眠たそうにとろけたまなざしを俺に向け、そういった。俺が今ドキドキしているのはどっちが原因だ？ときめき系か？やっちゃったどうしよう！の恐怖系か？それともどっちもを含む特質系か？クラ○カミたいな能力だったら大歓迎なんだが…。

「ああ…最悪な朝だ…。」

# 目次

「これが…恋…？っなわけあるか！」

「犬みたいに欲しがりやがって！」

「別にときめいてなんかない！」

「倦怠期てきな？は？」

「欲情するなんて…。」

# 1時限目

「これが……恋……?」  
なわけあるか!」

俺の名前は、相川博貴（あいかわひろたか）公立高校の教師だ。親に教師になりたいって言った時はそれなりに喜んでくれたものだが、友人や先輩からは、

「女子高生とワンチャンあるもんな〜」

「合法」って実際あるんか？」

「お前がロリコンだったとは…」

なんてクソみたいに言いたい放題だったが、もちろんそんな理由ではない。何だったら人間の個性を押しつぶし、大人にとって都合の良いロボットを作ろうとする学校なんて大っ嫌いなくらいで、一切かわりたくないもんだ。金〇先生っていう…この話もういいか？なんやかんやで先生ってものにあこがれを持ってしまったってわけさ。

「ひろせんおっはー！」

「せんせいおはよー！」

生徒たちの元気な挨拶を聞くだけで、かったるく感じる仕事も気合が入るってもんだ。

「おう！おはよう！」

それに今日は転校生が来るしな、俺が高校生の頃転校生なんていなかったもんで変にワクワクしてる。初めての転校生が自分のクラスだなんてテンション上がらない方がおかしい。

「ほーい、ホームルームはじめんぞー！」

「おっしみんな、いい話と悪い話どっちから聞きたい？」

「なにひろせんw外国の映画みたいなこと言ってるwww」

「てか悪い話とか聞きたいくないし！」

「なになに、一時限目の体育無くなった？」

「残念ながら体育は無くないし、それはいい話でも悪い話でもない、今日な……。」

俺が急に真剣な顔するもんだから、教室がシーンと静まり返る。コレコレ、こういう雰囲気って大事なよな、っていうかあこがれだったところはあつた。

「転校生がくるんだ。」

きまった……。良いとか悪いとか、転校生が来るっていう良い話しかないよそりや。最高にきまった。

「……………」

「えっ？」

なんでこんなに静かなんだ？もしかして転校生が来るの嬉しすぎて声も出ないのか？俺以上に感動しちゃってるじゃん絶対。

「溜めて言うほどだった？」

「まあ、驚きではあるけど……。」

「ひろせんの好みの女の子来たとか？」

「ヤバwwwひろせん年下が趣味？www」

ジェネレーションギャップってことにしておこう。

「まあ、そういうことだから：よし、入ってきてくれ〜！」  
教室のドアが開き転校生が入ってくる。

「はじめまして、大久保 明弘（おおくぼ あきひろ）です。」

転校生が挨拶をした瞬間教室に黄色い歓声が響き渡る。

「なに！めっちゃイケメンじゃん！」

「モデルかよ：スタイルめっちゃいいじゃん！」

「こりやせんせーも溜めるわ：。」

さっきのテンションとまるでちがうじゃねえか：。まあ、確かに大久保はイケメンだしスタイルも良くてなにより。

「先生の話とかみんなのツツコミが面白くてドアの前で笑っちゃうところだったよw」

嫌味のない笑顔でさらっとこういう事言っちゃうんだよなあ。それからは転校生の質問コーナーみたいな感じになり、一時限目の授業へ。大久保は運動神経も良く、クラスの女子が並んで授業を見物するくらいだったらしい。

「若いっていいね。」

三十代のおじさんからすればそんなセリフしか出てこない。つまらない青春を送ったわけじゃないし、何だったら甘酸っぱい思い出だってある。でも、もうこんな風を十代を楽しめないのかと思うと、どう

しても目がうるつとしてしまうものだ。さて、おじさんは仕事でもしますかね。

ホームルームの終わった放課後、俺は当番である各教室の見回りをしている。ゲームやら恋バナをし  
ている生徒に軽く挨拶をしては、

「遅くなる前にかえれよ。」

と声をかけ次の教室へ、もちろん自分が担任する教室の見回りもある。

「ん？」

うちのクラスのやつらは運動部が多いせいか、いつもは放課後の教室に人がいるなんてことはない、は  
ずなんだが……。

「あ、先生お疲れ様です。」

お疲れ様です。って生徒から始めて言われたぞ俺、こんな出来のいい子すぐにでも彼女できちまうんじ  
やないのか？

「おおお疲れさん、どうした？忘れ物か？」

「いえ、帰ってもやることないですし、ここら辺で寄り道できるところもまだ知らないですし。」  
そういえば大久保の家は母子家庭で、母親はバリバリのキャリアウーマン。出張が多いらしく、ほぼ一  
人暮らしの様な状況だったな。

「そうか：駅の近くにゲーセンとかあるし、そっから少し歩くと本屋もあるから。」

「そうなんですか！じゃあこれから行ってみますね。」

始めは気さくで誰にでも笑顔を振りまける青年ってイメージだったが、なんだか悲しそうな雰囲気が出ている気がする。気がするだけかもしれないけど。

「それじゃあ、先生おつかれさまでした、また明日。」

「ああ、おつかれさま、気を付けて帰るんだぞ。」

生徒にしては大人な挨拶を交わして、教室から出るときもペコリとお辞儀をして出ていく。

まさか、こんな好青年とあんなことになるとは、思ってもいなかった。

人間ってのは不思議なもので、数日同じ空間で生活するだけである程度仲良くなってしまうもので。

大久保はすっかりクラスになじみ切って、初めからこの教室の一員だったんじゃないかって思ってしまうほどだ。

「あっきー昨日のドラマみた？」

「今日の昼休みとここで飯食う？」

「部活どこにするか決めたー？」

いや、前言撤回だな、なじみ切るを通り越してテーマパークのマスコットキャラクターみたいになりなってる。名前を聞かない日なんて土日祝日くらいだろう。

「…。」

ここ数日大久保が俺をじっと見つめてくるようになる。睨んでるのか？そう思ったこともあるが、どちらかというと熱い眼差しって感じがする。

「…あー、よし！みんなホームルームするぞー！」

まあ気にしすぎってやつだよな、いつも通り仕事するだけだ。

「っていう訳でみんな数学ってのを暗記するだけの科目だと思ってるけど、実はそうじゃないんだ。」  
いつも通り数学の授業をしているわけだが、どうにもいつも通りじゃない部分がある。そう、あの熱い眼差し。

「…。」

教科書や黒板じゃない、間違いなく俺の顔を見ている。気がするとかじゃなくて、これは確実にそう。

キーンコーンカーンコーン…

「あー、今日はここまでにしよう、お昼休みだ、みんな沢山食べよ？」

視線がチラチラと気になって授業に集中できやしない、なんだ？俺なんかしたか？っていうか、なんかしたとかなのかこれは？睨まれたりあからさまに嫌われたりするならわかる。

「なんか調子狂うな…。」

「せんせー！」

「うわっ！」

急に後ろから呼ばれるもんだから、思わず声に出して驚いてしまった。

「ああ、大久保か、どうした？」

「えっとー、そのー。」

なんだ？なんなんだその目は、どうしてもじもじしてるんだ？

「一緒にお昼食べようと思って…。」

「お、お昼？」

ドラマでしか聞いたことないぞ、「一緒にお昼食べようと思って…。」なんて、しかも普通異性から言われるもんじゃないのか？

「はい、先生との交流も社会経験になると思いますし、将来の夢を決めるヒントにもなるかと。」

「あ、あー…：そうね、社会経験ね、確かにそうだ。」

なんとも先入観と言うか勘違いというか、思い込みだけで判断してしまった…。

「俺はいつも職員室で食べてるけど、今日は裏庭で食べるか。」

「はい！」

裏庭で昼食を食べる生徒は意外と少ない、うちの高校は大きめの学食があるので、そこで食べる生徒が多いのだ。

「大久保は弁当か、自分で作ってるのか？」

「はい、最近では作るのが楽しくて、趣味みたいになってますね。」

大久保の弁当は栄養バランスも考えてあり、見た目も良い。

「先生はいつもコンビニのパンなんですか？」

「ああ、二十代の頃は自炊とかしてたんだがなあ、なかなか続かなくて。」

「じゃあ明日からは僕が作ってきますね！」

「……………ん？」

「え？なんか変なこと言いました？」

いや、変ってわけでもないんだが…ねえ？みんなもそう思うよな？

「人に作るとまた違った楽しみとかもできそうですし、一人分だけって結構食材無駄になるんです。」

「そ、そうなのか…それじゃあお願いしちやおうかなあw」

なんか流されてしまったが、男同士とはいえ生徒とこんな関係になって大丈夫なのか？そう思いつつもニコニコしながら弁当を食べる大久保を見るとなおさら断るのが悪く思ってしまう。それからは俺の大学生活の話や、受験勉強の時の話、社会で上手くやって良くコツだとか色々話したのを覚えてる。職員室に戻るときは変に緊張してしまったよ。別に悪い事しているわけでもないのに。教室に戻った大久保はクラスメイトから何処に行っていたのか、質問攻めにあっただらしい。それからというものの、明らかに大久保に絡まれる回数が増えていった。

家に親がいないからなのか、担任である俺に必要なコミュニケーションを取るのは、寂しさを埋めるとかじゃなく、何かのSOSサインだったら、最近は大久保が俺になにかを気づいてほしいのでは、そう考えながら帰宅することが増えた。

「いじめられてる感じはないしなあ…。」

「誰がいじめられてるんですか？」

「ああ、いや、あくまで推測の話っていうか、そもそもそんな風には見えないからありえないけど。」

「そうですか、大変ですね、お疲れ様です。」

大久保はほんとに優しいな、俺が何かに悩んでるのに気づいて…ん？大久保？

「おまつ！なんでここにいるんだ!？」

なぜか大久保が俺の目の前に立っている。しかも俺のアパートの部屋の前で。

「カギ…なくしちゃって…。」

なんでも大久保は鍵を無くして大家さんに連絡したところ、スペアが無いので鍵屋さんに頼むしかないと言われたとのこと。鍵が特殊すぎてすぐに用意ができないらしく、俺のところに来たらしい。

「大久保、その…どうして俺の家を知ってるんだ？」

「体育の小林先生がこのアパートに住んでるって、相川って表札があったからここだと思って。」  
小林の野郎マジでおしゃべりだな…今度夕飯奢らせてやる。

「そ、そうか…と、とりあえず飯でも食うか？冷蔵庫なんかあるかな…。」

「あの！良かったら僕が作りましょうか？タダで泊めてもらうのもなんですし。」  
そうだった、こいつはよくできた奴ってのを忘れてた。料理も上手いな。

「お願いするよ。」

いつぶりだろうな、テレビを見ながら台所の音を聴くなんて、そう思いながらなぜか母親の得意料理を思い出していた。

「すごいな…あの冷蔵庫の中身からこんなごちそうができるなんて。」

「なんかおつまみみたいな感じになっちゃいましたけど。でも味は保証します！」

牛丼屋でもらえる紅シウガ入りの卵焼きに、コンビニの千切りキャベツたっぷりのお好み焼き、冷凍食品の唐揚げは甘辛い味付けに変更され、これがピタリとビールに合う。

「先生ってお酒好きなんですわね。」

「ああ、冷蔵庫の中身酒ばっかりだったろ、飯より酒って感じでああ。」

歳をとるにつれ、ストレスを酒にぶつけることが多くなった。若いころはカラオケやらスポーツやらでリフレッシュしていたものだが。

「まあまあ明日は土曜日ですし。」

「おおー悪いな。」

大久保は俺のグラスにビールを注いでくれる、生徒にお酌されるなんて不思議な構図かもしれないが、そんな状況がなぜか心地よく感じた。

「おおくぼくおまえってやつはほんといい男だよなあ〜〜！」

「ははっw先生それ何回目ですか〜w」

「何回目って…何回目だ？」

「せんせ、これ何本に見えますか？」

「あー、二本か三本くらいか？」

「くらいって…。」

「…。」

ちゅ…

「ふふっ…。」

ちゅ、くちゅ…っちゅ…

「せんせ…もう、我慢できないよ…。」

「っあ…んあ…んっ！っはあ！」

「あれ、もう朝？へへっ、おはよ、せんせっ！」

イケメン男子高校生は眠たそうにとろけたまなざしを俺に向け、そういった。俺が今ドキドキしているのはどっちが原因だ？ときめき系か？やっちゃまったどうしよう！の恐怖系か？それともどっちもを含む特質系か？クラ○カみたい有能力だったら大歓迎なんだが…。

「ああ…最悪な朝だ…。」

「最悪？昨日はノリノリだったじゃないですか!？」

「いや、酔いすぎて覚えてないが…その…。」

「その？」

「何かしたのか、俺は…。」

そういった瞬間大久保は目をウルウルさせ

「せ、せんせっ、ひぐっ…僕とは…あそっ、あそびだっ…うう…。」

なにになになに!!なにこれどういう状況なのどうしてこなる!?

「あ、いや!そのなんだ、遊びとかそういうんじゃないっていうか、酔いすぎてだな！」

「あはははっ!先生ほんと面白いね！」

「おまっ！」

大久保は腹を抱えながら笑い声をあげる。

「先生昨日は可愛く喘いでたのに…ベットでは大人しくなっちゃうタイプなんですわね。」

「なっ…。」

「あ、僕今日是用事があるんですけどもう出ますね、冷蔵庫に朝ごはんあるんで。それじゃあ。」  
大久保はペコリとお辞儀をして、家を出ていく。俺はその背中をなぜかぼーっと見つめていた。

「なんだよ…これ、この感じ…。」

これが…恋…？…っ  
なわけあるかあ！